集義外書 [illegible]

ロ 13
361
4

集義外書巻五

脱論二

仁13 961 4

一朋友問て云黄金白銀は乾坤の至精なりと申侍れは無用に出て是は人の湏用にたゝすといふ人有り又有人答て云天地の間は常の理なり人道を文章となす事なれは唐の織物を用ひて衣服の美をなす事も礼なりと申人有りいつれか是なるや　答て云日本の四海に備りたるといふものを王公貴人し天下の用にたる所也金世ハ王公の器ものとす人も故なき中事に山沢の至精と為ぬるへからすして金銀何役も出来り是は人の湏ひて湏し山川海物の類までもあらんや又有人を名湏といふなら久しくして成付物也

業種なとのあしをなさへし　あしの処を良処と改る事ハ政に
のあるやうなれ日本が開て末つかへし　昔唐なとより日本の
きぬのを用ひける時は久しくて人道も風流もなりき　近代唐より多
くて常にこうなれた人道が中しくなり侍り人も少智の知らるゝ
よりも内にやくらへて徳を喜ひ時に用きく殊にく　侍まハ金銀も世中に
多すきくなりても古の種とはへて山中に埋もとゝもやうく侍らん

一朋友同志と云拙者と今更人西人もちらしより家の老を侍り同役なと
家中の者とくなつき侍り家中の形はひ侍りくハ主人つくかならすとも
切く物はひ音信ん入も致し　侍色ともまもむき致くく親に
うすく侍り何事その名も拙身のやうなるその分れハ其職分を失ふへき

やとなきありしを侍を何として人の親と出来侍るへきや　昔て云
御同役の人天質（シツ）寛（クワン）裕（ヨウ）温（ヲン）柔（ジウ）にして又人親とみへき器量あるを
御家中を引立し　なハ奉なるを国用軍用にも申ちせてきちうるを
あるへし　大勢のなりとみを親にもしと常しかんらりを御同役の人
を親とみなへし　自他の時も忠敬を旨とし武勇をあらはしなれは家人を
よくしめて御同役を助けなへし　毎事の時も一人我身をよくし
外に用事被用を内に用ひぬて家人を愛しをはるなくへし　人あるき
事にかうちや御同役の人を忠敬の為代とらし　ぬハ忠孝忠志を
かへりても一日の助勤をしぬともても鼓舞あるへし　いかんや御身
のそそけなるへきや　忠敬らちのたてを忘るへし　忘て御同役と人の

却て己身を修る様に致し志すらんことを欲しては先心を正しくすへし　其

事のおこれるをしろしめすの凡人に候道の識を有へき者ハ敏書をよまさるへからハ

何の志も免そや　許由ハ天下をゆつらるを辞して帝堯の代なりし　天下を

平治せしめて山林田舎の間に住居をしめて一簞一瓢の食を

人にゆつりて自ら楽しむ　其志をたてハ何の時にも凡情を生せぬ

きぬりん丈礼義の去れる所は人の志にあらねハ説に悔しからさる凡の

知り己の振舞音信等ハしからハさもなき人も起して

たすくれハ金銀の沙汰ハ外にくし　心を定らし幸心に如へしと凡の故人

百姓等もめくる心は忠なるへし　邪欲なきものとなりて気を志つめんと

するにして凡情の欲しけることを察しやうて例の志待へし　ぬまて

獨処あらん時ハ初ゟ君子の心地を考ふへし

一　故者の無実の流言によりて喪失する事有り　親類知音是をいましむる事を

かならす喪しみて此讒人をうらみんとならハこゝろを尽して告て云

一人喪失するさへ禍なるに親類知音又喪せんとならは禍をかさぬるへし

今讒人ハ貴方にハあたなし　恩らん事を思ハん貴方達讒人を

うらみて利をもとめは喪せんか　然らは讒人却て貴方達をあしさまに流言して又

禍の種をまくへし　罪なくして喪せは強き者ハ志らす　大弁ハ弁せさると云

微々に忘しるへし　且一喪者ハ年たらすして一年来仕へ

いまたありくして無職なるに愛とす今年は天より文武のいとまを給ふ

くたされけり　此時文学武藝に達すへし　親類知音の弟子内ても喪者に

よりて今日は幸甚なれや　殊人にもあらずはあしくて福神の恩を以て報謝すとも可なるに何もあらずしてうけるさえもや

君子は陰中に陽をとりて吉に叫ぶのごとく福を養ひて禍をさけるものし其上貧賤憂戚は天道彼好徳の玉合し　寸陰をおしみ日をもすべきの時に喪葬法度をなすべき時節に当りては前の位禄にこりべし　争治の事をなさば十分に利を得ても今の人情にあしかるべし　くしんをせし者なりといふとも技芸しかる潤度功へなれ一括中は年来のうえをすてて徒党を立し罪ある人に網のつりに我身を忘ま憂を訳に及ぼすのかくのことを知るしかるべき

一心友向剛毅（キ）木訥の質（カタチ）ありして仁にちかきや　云剛毅の人友とすべしとれは其勇力を用ひ物欲にもまよはず利害にも屈せぬ木訥の人素（リ）朴遅鈍（ハクチトン）の生付にてそだつ時は外にもまよはずして已の為に仁に近し

一朋友向我志ある町人は学を好む者なり　尺て為すは町人の振りもあるは武士の補のよし　学力のなす所也　云町人の振になることは市井の利心なきことなれば　武士のさしとは貪る事を物からうひまとし義理のみおもき処有ことなり　云さては腰に刀をさし行儀よく武士学者あまりのこ事とて利害にかゝわる振に見へ行り　云其道の学に腰をさせ町人として向学とは町人の風体をそなへ町人と見へて人をもかり罷り異なるべきにて　さうしめ町人にて風体を武士に似せぬる事は町人は

人の用しむる者なれハ人の下たるの職といへとも分を過し恥をこへて

人の上にたらん事を好むもの也　凡ハ商の道なれハ人の備へ平人よりも

慎しむ事をまもるへし　学者とせは人を導きて相手相續の

正徳を教るなるへし　凡体ハ商を居らく商を行ひぬれハ凡ハ市井の名優

まなく義理の身をしき恵あるまて人を助くるの仁心ありといふとも

後にかくは奇特なるへし　昔人の物語せしは長袖の家へは出身筋なくなく

実なき者のあり　学問して文才も有り其芳親の代より富貴なり

志なれとも不義の富ある事を知て　あるにもあらぬ繁昌をとりて

迚も成るへき事にて治まるへきやりなきものハ妻子のたよりきまらす

心しほきしける節　古きより志ありともなくなれハ帰来しぬ　今の

人ともよ旅人にも乞食なき事を恥すへし　今時市井の中にて一筋によらすある

人家もなし　わしき事しく長き及ひ富貴なるの二三人有りき家の家人

十人或十人ハ世家なるを甚のへき所の身分ちかのうちにきまりもせすに至る

とをも人ものの不到なくして入るより付富人は法の商人なれハ不及

乞食事なれハ学者にしても天下の万事を任せすとも能々

餘なるもなく事をはまことにしと呼ならき　云則ニて今かへる富

人の学者にしかするに金銀を出しにして人をまつすることあるなる

者なりとも思ひ仰なれ　云ても市井の商売も性儀して

まなるへし　浮かにしてもや商道理に作りたる行儀も

見及なる者也　云仁なく義なくして行儀よろしきは本備はなり

天下の政理よりなす事ハ聖賢の書をよめハ書の道理也

一学者向風為ハ神聖の御代よりはじまらずといへども能々後世ハ賢者とましますは時代をもかへ出でけるといへども世の学者諸説を考へて乱をまねきして動揺に風をなし他を難じて下れ家の　至是其風にあらぬ上者も人道を志て学して虚名を求る事を恵有るにかけ志つのたる者ハいやしくもあまりかほつひて一度に天地に背陽をあることなきすしてよく文虚陽を以てなしを以て家学鳳凰の形ある者とも正の徳神聖を人倫の本とするは鳳の妖怪也如くし御恩の君子まで外なりけるかるし　これ妖物成れハ久しき禍あるへし志ある風を見てあると天下の民に法をゆるし　禄を無用へと見て主天下の有る理也

向背陽以て施ともも徳うすしといゑてあへてうき稀なりしハまことを賢とし志すは周の礼を立る気の船に乗へる我性にみしして燎（テラシ）乱しハ甲しといふ家をかりしつく云論に背陽を告まとしるりしの徳の藩を着て底せさるハ法ことま奇特しろき周の気を貝視の天意とし王も無心にして其夫の賜をうけかふし後世の福を祈るに似くたるそのさしもた縁事と見ても悦とは天地満別の心し虚名を好む福を祈るの名たる道ハ人のつらん所をたるをさし恥の意もなし人を見るまて道に叶ひ機準的とすかならずしやまに道へるれこの旅に古人も人倫の道にて政刑道なき世の豊年の時といふは却て今年しき事として書籍も志の至は政事ち

なれ世には天災地夭ありても五穀みのらず飢世にも内外の豊年と

なる事もあるべし　又世の仏法も是ありしかども其世の世の中に

よろしき災害のあるをは末代濁世の故と申し　闇主世上の恥とも

成ともせずかくの如く乱世のことゝ打すておかぬ儒者の心得　直言

するとの謂れは　それしるしと名付ていはゆる小人は悪人の中にも

出世のことあれば君子たりとも悪人の中に出ずまじく　古の賢君は時の

運よろしからずして水旱のうれひ有りといへども自己の不徳の罪としてよく

なげき玉ひて大君は天地の万物を生育し給ふ心を用ゐて

王とあるとはいわれある事なり　君臣は主上の徳により山川のよく雲雨

を起す功用によるものなれば諸侯を始として旅人豊年を楽しむとよ

ありとて災害生ぜしに偏乱にて其色を天地人三才一貫として聖

人の禘の祭の義を知るものゝ天下を治ること掌をさすがごとしと

のたまひしもこゝに有り天地日月星も堯舜の時の天地に変わり

春秋も堯舜の代の春秋に万物皆かはらぬ人の形もの同し何を

んやそれ乱るべきや　教すくなきの甚しきなり

一　心友道の行はれん形のその有り昔より云君子馬を失ふとも睽の

初九　喪ㇾ馬勿ㇾ逐自復見ㇾ悪人无ㇾ咎とのありそれにて道行はれざる時

下位にある君子の才に富む学者有ても世に出る事を好まず　多くは又んと欲する時は

道に性もて走る馬を求るに　願ひて独りさまよふ事かる時は

害ある所なり　多く得んと欲するの君を求むる時は馬を逐ひ求むるは馬

自らつゝしむへし此時ニ當てハ悪人といふとも避へからす親しみて

心安からしむへきのミ也悪人を見るといへとも之を令去る時ハ禍ニ必そむくなるへし

初九安からは何そ睽へきや只其道をふむものは心自ら和なるへし親より

人と交るは人何そ睽るへき人ハ人と交るへし小人といふとも

へられ䷥（ケイ）ハ火と兌と水をもてる其志同からすとも倖を合て一卦

となる二女同居して其志同しからすといへとも是君子と小人と其志異にして

同く世ニ居の象なり又今の世の道行はれされは君子と世をさるとても

これを世の罪に非して世ニ居るの名形色をさけすといふ人あれは

世ニおれて益あるかとききて久へとも害有ゆゑに道をまもり世ニ

うちあるへし其の形人をうかゝひ操なるへし害を加すことハ人の

まして動て害をとむへきものは其害をおそれて罪をかゝむるとて動ことを

あるゝ事世人其事を家にかれとも又今の世人の罪にあらは居るの名形をさそ

世に大に助あるとも一有りもろしのまゝならはあるからへし　經曰民義吾人

の口より出すへからす是又人情を知る所也　向これ人ありしも世ニ功なく

後徳に此陽報を後世必居行るへきか　云徳と害とはいつもかく有

なるんは此後のうち避られ　向継らんもせ悪人の賢知の人をさへこそもハ

何そや　云是人情の如く敬行響あり賢知のやうに有る人をなさむものハ

忍ふあれハ必す智者有り南徳にして争んあるなまよ乞ふこそのを

好しけるれともむんあるは睽の上九ニ云睽孤ナリ見豕負塗載鬼一

車先ニ張之弧後ニ説之弧匪寇婚媾ス往テ遇雨則吉ナリ上九ハ睽の時ニ

因て上ニ立て徳剛ふしてうらるさんとは賢知の助なきはそむ
きて邪なり我知に自満して賢者の諫をきかされは身徳の光
あきらかならす其の極まりは己を失ふとし志ある人のさとし悪むこと
家のけかしきこともも泥を身に蒙りたるを知らす恃て慢（ヲ）上に
立人賢知を求むとせるを見て小人是に力を得て種々の虚説
を云讒をなし其の無き鬼を一車に載ると云は無き事を有とせし悪む
心よりも人の無き事を現すともあるへく如是人を讒言して
申しきる人あれは実の説もあらはれ悪むへきこともかし先はら哉
化て財もなく毒をのみて怒しかとも徳は強く離して　やゝかく也陰陽
立て和せる現はる為となる營構の理也物極まりハ必變せる八卦の理也
ともくろの極まりは反て和する時あり是を守る人は一旦の苦難ありとも
して正理を守て時を待へし（しとこ）文悪する人必しも君子に非れは
みらむ人必しも小人に非されは積の徳もなく雨のちされゆきそへもなく
其の所にはそもなく其のなき云罪をなし虚説造言ともに実現とおもふ
あるへくいつても鬼を形なすわれは車のすへてされ志かるのまりと云かくし
虚説讒言のおそろしきことも知るへしその後ともは海とかさる
人も才のよきなりて無へかく現るゝ孔門の曾子も大賢なれとも中に
同名の者有て人をころせしを名の同しき故にあやまりて曾参
人を殺せりと告る者の有り賢子曾参の母杼を織なからも不驚
しても居たるに又来て告る人あれは信せす又来て

嚙ることの有り其の時母指をかけ給て走まゐりし曽子の覚て其母の伝
ところへまいりて三千人に及ぶを見ハかくのごとし聖賢の智もあるものなれバ
道を伝ぜすと云ことなし　志有る友は聖賢の道に入る事を覚れ
て道者を千百のうち九人を吾智にて授けして道をなしハ出来まじ
何事ぞも疑く思ふこときこゆるといへて道者を千百ぬきに
菩提をあらハし後世のそしりをいとひもせぬとハいはれもんやそもそも不思議
このあはれなる事や

一　朋友向仏者ハ後世の功徳にて望むべし　行儀を持給ふたる
者所ハ儒者に好人なき事ニもあらず何なりや　云もの其身を守りぬれ
この物語も有り　志あるともも出家のうちに億兆の仏者の中より五人七人
えり出づるものと百人にても見つさる儒者の中に一人ありとし云者を見て
仏者千人の中九百九十余人あしく一人も無事なる凡僧あるは二三を
出家らしきといふ也凡僧なりぬといふ家ハ五千人の中に一人も万人の中三二人
なるべし故に仏者も出家と坊主の如くあしきとて二と思ふなる子を持る
者何ぞもなるまじき子をば坊主にせむといふ事も行ふかなりといへども成仏得脱
の志にて出家するものハ万億の中にも一人もなきに武士も百姓もかく
農工商にも奴らの者ハせんかたなくして渡世の為に出家せしものなり坊主の
あるハ子の生付あしくてはやく家業もならず乞食坊主の弟子に出しける
これも我と知りてもふかき事なれハ渡世のためにやとて出家せし也代の儒者も
又かくのごとし　仕官もならず市井の中より渡世のためにこの儒業をするものなり

武士の中より出るもの有りといへども思量なき凡子とは医者の如きもんにて儒者
まなびもなくして素人医者の子の文才あるもの医者の家に出生は大
かた筋の中しきものに弟子取ぬ人あしく見へて又〳〵に於て仏者
儒者なりといへども其ものは出家となる事中なるよりて其上に能其外の有
儒者は才なくなるものは病者とても兄弟の有るとしも人に何事も任て出る
事なきは傍らに見当しといへども仏者も行ひ殊勝なる者は何事も志
往生極楽の取たより出離生死の為なる故に町人の志有やとなるとて戦場に
いでんとするにも唐天竺へことなりきてもまた海陸の難も渡りきあかりき
あるを知もせる事は武士の仕へなる事ありかしこまりて利あることも志
きは有るに一時西方極楽南方無垢浄土等の虚なるをきゝて天地の理に背也
なき事を行ふことは何ぞやとて殊勝の修行なるべきや又一種の仏者
有り実に名を求め利を無むといへども無欲清浄のふりをして人に信せらるゝ
あまた無欲の真似に利ある事と見ゆれば儒者の中に能儒たる人なりは大人も
能々遂たるべし甚だ其の者は殺也達士より初て根本なき也
ある故に大半の才なきの出家と後世の儒者とを同じく座はいふ也猶以も
あるべからず総中に仏者の大欲に乱行の者とも出家は世間の凡人よりも
勝まさる悪人あり儒者たるは刑罰をも行ふべし出家ゆへにまた
のがれそのあり来る事は悪をまぬかるゝやいらん雪霜の類は儒者と
名のりさる人々の中にあるも人体の者なれば別に作りて世人の耳目を驚
罰なすべき事なし蔑にして松柏を知らず世乱れて忠臣を知るは

大家よ植ものは甚徒邪なるべし愚人の為ハ平地のごとし愚鈍の為ハ
山のごとし山ごとしといへども平地ハ片段へられ山にして險阻を行ことハ
貝をおそろし平地にして大道を行ことハ人おどろく事なし
智家にしてハ是暑あるをおしきとぶ為をけんそくさせてハつゝらぬ
平人にし悲き山にしてハころまてとおもへきもなくして平地とすれハ小村も
ころころましいここを以て君子の仕の大なる事を知べし

一朋友同歩行の人に乗て馬上より嵩くおるものは無へき也けし
おもきものハ無禮なりといへどもおろかなるも所ハなりさるそのなし人なきに
あつらひてくるしうるやしまう　云んの主やうにて苦労となりて其み
とも如なりなしもつうしきとおもふに故に苦労なり故に無禮も有る人の苦
をあるに仁義礼智信よりも仕出たし　礼をわけるハ苦労の大なる事のなり
老敵若を行ふことを其のし多数なく千度若くも苦労なく却るべきも
んあるべし　幸子武士に年四に馬の家より無[illegible]の如もきを御なく
ありなん自の一なり人の礼を行ふのとなりて武士の其し[illegible]兵中に有
四國の山内対馬守殿ハ諸侯にして[illegible]の馬よりおりて断し無するこそ無礼
の所より手をめしして色語[illegible]をゆるしして色代もしめても可なり
今の風俗とそも無礼とせず其何に無数を乗馬よりおりて誰教めし
[illegible]とのうなへて一度此礼によ[illegible]てのけ対馬殿とされハ[illegible]にして若苦うけ
しとおもへハ親文か仕ち殿より古礼失[illegible]ぬ家柄なり寄山内一家
ハ礼義正しといへハ使後三坂の城を御預被り殿の[illegible]一日の事也

諸侯となり城主となる事ハ五三代前ハ百姓なりしてゐる武士なる三島より
おこりて出しところハあやまりたる事也と今も見て施中もんの付人も出来し紛れ
たゞの事と知られハ国家のふ礼をさのミまで人もなし あるしもし
こそまさぬ人なきハめつらしき事なり 諸侯を又そのうへて兄弟ともある人
夷の微賤より出たる人もあるハ 当時の末の代にも 此子なき時分の御法又
諸士の為ほ武家ともいふとも是しめし人なく乱世と成りたるなし 斉の桓公
の臣管仲ハ天子に朝せし時三公の次上卿の位を以て礼をうけへし
管仲辞して下卿の位に付りと云て上代廃すも賢君の御代にも
陪臣ハなかりしに辛ぬとて路次座列事をもまたも陪臣ハなし申せし
次座につくといふて直臣陪臣の差格の礼とせり 今の礼ハ失礼なり 王者の
天下の権を失ひ玉ひしも武家の代の長久なるゆへも諸士の人のまよひを
まよふまじ

一心友問学校の政ハ人の才徳を生し民のまよひをさけ人君侍を不失士民
風俗あしく天下長久の徳を永く伝ふとも秋終主代の学校の術ハ先ツ仰れ
唐の法をあひ用ゆへし 日本の風俗よく守るへき事ハなく 云和漢
古今ともに文を実とかゝられし 国俗と時務とにより右を先とし左を先
まゝるのかゝる事有へし 今日本の国俗ハ武をもちひて文を用ひ作れ
志うきハ文なくて八一日もたゝぬ理あれハ左ハ文を用て武家のこ今の人
情をかへして学校を立ハ右を先とし武芸の上手を置て十五已上の子ハ
弓馬兵法をもちひ日々に武芸に進ミたるしあらは諸士学校の益を

無益し・　問　何ぞあながちに文に志さんと云や　云　自肖月之日分けん先

て方が利発自身も其君臣の礼を知らハ文也　上下の職務を省し

主客の礼義なり　又従我も見るも文也　気乱節句結合婚礼元服

病をなし死すとも一ツも其の事ハ文に非らずといふ事なし　幼少八

八九歳より十三四まで寺へ行きて手習して文字を習はする也

寺へ行かざらずんば気性ひがみて愚となる事を云ども　当世諸国ともに事をの

ほるものへなりかたし　武道の出来たりし時ハ文なきを恥とおもへり　然に

なしの武士たちは経書文学の人多かりき　楠正成も手に送書せしも　勤学の事

を専としてより　後世武道おとろへてより　却て文道をいやしみし　亦名目を恥とせ

せざる風俗となりてより　類多く初で其悪さ常とせる　学者より他師を笑

同附役人有之　器量に絶法なき事ハ法を三十歳以下の子どもに習はしむ

志ろけなきを教へ十歳以上ハ弓馬兵法を専として手習文字をも学ばしむ

の外渡世に個しへなりぬれば其中にて志ある人々は別に問うけて四書五経

を講習し礼楽弓馬もならひ其事をしも稽古し文武二道の士となるへ

然も今の国俗とも変りてあるべし　問　学校とて立おきても

國々城下町中に武芸をならハしめむ事を務めて弓馬ならびに剣太刀等の事

を稽古せさむるとも其芸なき者の多きハ何ぞや　云　其師の所へあつま

りて稽古するとも其身に人のあしきをかたりてこれ見るものを知らさるか

専ら万能一心を以てこそさる人稽古せさるものよりなんぞ　稽古

其中のは人のよからさる有り　父兄とあるもの是を以てふもされ是武芸

の師ありて養はれき一なり学校にては孝行貝付有其上に郷にて
私の年令を禁ぜられば人々ら勤むるを何りても人をそこなはぬやうにす
術なくて芸術をもよく其事は又学校にて別に會日を定めらるべし
学校の事は陰陽の学校のうちやう武家の様によりて後世法をとる
人何ゑへきか

一 心友問 夏后氏ハ五十にして貢すとありて一夫五十畝を受て五畝をかぞへて
年貢とさしけるとし殷人ハ七十にして助すとて学を始て井田の制有り
六百三十畝の地を画して九区となせば一区七十畝也中を公田とす其外
八家各一区七十畝を受たり其力を借て公田を助耕して其私田に税
せず故に是を助法といふ周人ハ是を用ゐ百畝にして徹す郷遂ハ
貢法を用ひ都鄙ハ助法を用ゐ耕作時ハ八家力を同じくして作る
故にも各百畝をはかりて取りけるこれを徹と云 其實ハ皆什一なり
貢法ハ十分一を収るの税とす助法徹法とハ九一なり又廬舎を公田
の中より取高人ハ十口畝をとり周人ハ二十畝をとる故に商民ハ七畝を
公納とし周民ハ十畝を公納とす 夏ハ井をなし 夏ハ井を
なさずといへとも什一なるを以て見まてハ貢助徹の中いつれも用ゐる
べきや 夫王代ハ貢に及ばず武家の代に於ても貢法を用ゐき
たり古の制の残りさる事なれはあらたまて皆十一の貢法は己に見えの
土地には井田の法ハ用ひ難し 中古よりも日本の土地の狭るる事によりて
皆貢法を用ゐたり
問 今の制ハ畧六分と四分百姓取り六分地頭

なりといへとも今日本にて十一の法を用ひハ大身小身ともに武士ハ一年も
立続く却て乱の端となるへし古とても日本までハ行ふへしとも相見え
作り也　六四分六分にして六分年貢となり四分百姓となるといふは
上田の水を入れハ田となり水を落せハ畠となり麦作等よりも出来て
田麦ともに年貢となる理なれハ也　中田ハ六分百姓となり四分年貢となる下田ハ
十分にして二斗を年貢とし八斗百姓となりてハ立かたきことの故なり
むかしハ中田ハ一年地を休ませて作せしかとも上田の収実に及へり
下田ハ二年休ませて作られハ上田の収実に及へり故に中下ハ地を
易ること多し　しかして十分にして一を年貢にさゝけ来り不易の上田ハ
京の東寺邊の地のことし今の世の勢にて十一の法を行ひもならぬ
尤日本も今とむかしとハ大に替りありむかしハ農と兵と一つにして
ありしを軍役ある時民間より出たり武士多く今の地士といふもののことくし
田舎のことく城下へ出て居所をかまへ居る事ハなかりしなり士と民と
わかちなくして十二を出しけり別に銭掛物ある知行をハいまたなかりし
奢倹節の事なくして強欲なれハ法の立なし十一分にしてみちたり
今ハ士と民とわかれて士ハ多く在り扶持取る故に知行といふも扶持切米
といふも多くあれハ十一の年ハさて置十二三とりても不足農よ兵たらす
此人ハ民奴僕となりて上の法をまもらしむ如くなり故に農兵の風にて
後世一旦事ある時ハ兵士も民もまぬかれてにけさりしハ惣
法なかりしなりて乱世となるものなり　向農兵ハ法にまきその

たりと承及候へ共ちからなく戦陣にハ先手と致すハ作法　首の
ことく農兵よりなくし　夜ニ出し志ある者ハ今の武士よりも入用に候得共ハ
云、気質は生れ付しきものにて道行をし学問をするなれハ自然ニハ如何
あるへし　人君たる人の心あるへし、諸士のうへにも気付て下々の為にも下を
民のへし　同年夏中まもりも民の為にもしかるへき事は一二
郡も其法行はれ民のためになる事を心かけてハ是ともいかん事へし
君子は業をはし先儒をわすれて継へき事をすといへ共世を治て後も
りし、不足の事はよく考候てよく治世をしたまへハ宜事へし
問、代々の賢君御心得あり大名の身にも如何へくハ一代の為にも如何に功なるハ
学ん事なし
　云、議論のふんありて道理によりて相継ぐ功をとくる
人ハ此事のこし学校の政をよくうけたまハ継君ハ次弟よりよき人ある
大丈夫とも子孫ハ乗りくさるへし
　同其法によく　云、日本の
今の時節世ありて所ありとも之は其にも古によるあるは時に当てハ是非
歴し　得ていたるへし

集義外書巻五終

集義外書巻之六

脱論三

一心友問曰世間の儒者の君子の儒にあらさる事を命をしらさる故と云今時心学者格法者朱子学王学陸学なとゝて多くわかれていつれも儒者に是にて候へきや　答曰三皇五帝三王の御代には儒者と云ものなし　儒の名も初て周官に見えたりといへ共後世の儒者と云者のことくにはあらす周官に有る所の儒といへは士君子の重職にはあらすして郷里におゐて道藝を教る者にて今ハ小学のことくにして六藝を教るの師儒なり士君子とハいはす今日本にていへは武士の武なくて達せる人の生付仁愛ニ無欲なるあらん此人に禮楽文章ならは

古の士君子なるべし秦の代より天下乱世なるより久しく士君子皆
武事にのみかゝつらひていとまなかりし子孫ハいよ〳〵文字をしらて道をしら
されハ師儒の民間にありて其子孫もなし人これに志学して問者に
教へしなりされハ古の事をうつし伝へるものは此中昔の儒のことなり
鳥なき里の蝙蝠ともいはれ王侯卿大夫といへとも此儒に聖賢の
事を習ふ事となり此より聖人の道を儒道といふなり日本の武家も
世治りて久しくなりては武士も武道に疎く成て藝者に武道を指南
させらるゝしと観世の附古卿を離れ詩を失ひて日本の中より
東公人の振舞多くなりぬ喪乱中もくる後此らより東公人日本の軍人
のことく成て文学して遊説するその有り官職禄位なけれハ五等の
人倫の外に居て儒者と名乗て道学を以産業とせりこれ異端
遊民の始也其後見て道家の徒出来佛氏の流後又出来て道
学を説て世を渡る遊民多くなりぬ異端を仙佛の徒のことくあらは
儒者其中に博文の儒者ハ一向に一役に成りたり國用を達するその
なれハ遊民にあらす異端と排られ小人の儒なりとも古の師儒のよし
心見者格法者朱学王学陸学なと名乗ものは遊民也異端といふ
もしかれハ東ハ文学に流されて史儒の用を達せん文学あれた
る優そ人に交る好みを事とする者も有東ハ去儒者を道学を
任として何の修徳もなきものとし世に佛者の五倫を離れ五等
を知て何の用にもなかれ佛道にすまて修行なきハ法力にて其日我

送りといふなるべし　堯舜を学びしも湯武孔孟の天地の大変に
あひ給ひし所甚だ経を常となし給ふことなかりけるを湯武の後湯武の行を
なしぬる者を皆濫叛とし孔孟の後孔孟の行をあやまりし者は皆異
端の人なるべし　顔子閔子の行ひをなさんとしては貧なれば日本の地士
のごとくにて家業あり　孔聖は大徳なくして澄に生れ給へば治統するの
神人にて小官をも辞せずして人の家臣として文武をおさめて国用に
あづかり給ふべき道学を説て産業を志ある者を批判し給へり　総ふ是
日本より見ては礼楽を学び問人と学者に多くかくれし　伏羲堯舜の
御代中国の見るべし　司徒教官なかりしとも門人あまりしは此をゆるし
是よりはじめし　道は人なり仁を道と説て世を済ふの理なし　付実孔子ニハ
なきこと也なれば外の所なる故に後世のあやまりの論と成ぬ丈孔子は
天吏にて素王と作為して夫子の事をも記し給へど古人も文同
なきなれば時の変によりて於ここのひの人は能く用ふべき教なし　甚哉
志して教を見て後生の者のあやまる所をなをさし　正位をも孔子まで
道学あるべきや心学といふなどいへりて真なり　指法と云は孔子より付
くる名なり　時不住の五常を去りて多く二聖賢の行に合ふ事を聖
賢の継統ともなすへし　ましてや後儒を師と成りて今時にあふべし
なまくも助とはすへからず　問礼記に儒行あり是れは聖人の道を
儒道といふも八害あるべしや　答云礼記なりは後人の附会あり
今に取へられ儒行の初に聖人の云なり見へざるは未し　定初の二千

六字に於てもありけりこの儒行も多ハ諸の人の法事なりしこと
魯の哀公孔子に問て夫子のめしたる服ハ儒服かと問給へハ孔子對て作るき
きる丘か若き時魯に住て逢掖（ホウエキ）の衣を着たり長して宋に
住て章甫の冠を冠りまた丘是をきけり君子の学ハ博し
其服ハ郷にしたかふ丘ハ儒服をしらすとの玉へり是見れハ孔子
の儒者にあらさる事明らかなり儒行の道をあしふにてはあらぬへく
聖人の道徳にあらさるし今礼義の風のこりぬるものは武士にし武士よく
学問する人多くハ儒人あやまりに知りし武士たるもの文武二つこれ
さしおきてこれかれをおこなふハ道ハ本道をよくわきまへし文武を
身に有し君る人を士君子といふし大樹諸侯大夫士にいたる君子なる

国家の理にして文武の二にわかることハ昔事ハ世に道なきにあらし文道は天下
国家を平治し武道ハ乱を治め賊を討蛇蝎（シヤカツ）猛獣（モウジウ）をしりぞけ
天下国家を警固するものなりしかるに中古より公家を文道の役者武家
を武道の役者とわかれて根本公家武家と云者をあるへからさるなり
なれとも世治久しくおこりさかえし御代の御ために道なくて尊も
公家は上法にこの人々武道のわさにうとく詩歌管弦の風流のミ事とし
かひしくハ事ある時ハこれらか征伐の叶ひかたくして地下の武家かての
ものとかはりて田猟する野人に似しものに印とて罰せらるる是今
の武者を武士と名付けり武功によりて大身になりしは武士も武事のミ
知りて官位高き人ハ武士に守護せられて女のことし夫より

文武二つのわかちより武なる文を治ことの文なるか故ハ文の文なる道理の
事ハなくて為へき哥をよミ詩を作りなん文臣と見へ人あるそのなし
文なきも武なきも治ことの数なるか故ハ不二族なるの義なれハこそ以つまても
もなるらも役者をもこし武族以武と見へたる者もあり　問文官武官
とふそのはいかゝしかりあらんや　曰今の武家ニハ又何事ニ御右筆
御勘定方なとそのたくひハ文官のことし　御馬方又御鉄炮方御旗奉行
軍法者なとゝいへるは武官のことし　役者と云そのはあまたあれとも皆武士
なり古の文官武官もかくのことし　二つにわかつときハあらんやハ何とも
名の治り故武士か治ことの武士といへともとなれは役者と云そのは其役あるニ
達セれハ外の事ハそのわかちもしても者しかれハ是故ニ藝者ニ人あら
ら役者を治きこし武家も武なるを家道をいれてまつ二ツいれつとあるを
今武の末の公家のことくニいれて家のうちをまもる成し

一朋友問小笠原の志川をとりて軍法の有家なるを　云まき古風
の法ハ軍法を大禮の一なれハ孔官の家ニ伝しあり軍の次第作法
を記しあるそのなし　只次ニ軍礼といふ軍の次第作法をみて其上ニ昔の
名将の合戦の法を案すれハ軍の善悪を大将ハ其外ニ軍法の勝負の利
あるなくそのなし　扱数ニ向ひて変化あるの有り　義経正成是なし

一心友問孟子曰遊説ニ訪ふありや　曰昔ハ次第ニ法度を知りもし親の
功の半分なくても子の代ニハ位も身上も親ニ同しなる者あり　歴代の徳の
後ニ何ともなき故そもあり　聖徳有りて其道の附ニ出るも下ニ生れし

孔子のことくなる人ハ天地開りてこのかたなし是故に世人無位の聖賢なとゝいふ
事なとをしられ且孔子の徳有て謙さるもなきハ人の気をもかねたまひしなり
子思の時ハ前よりや孔子よりも敬ひあまり孟子となりくしく人のこゝろ強し
あまた孔子の徳切の子思孟子に至て あらはれたるに孟子ハ其間にしたき
かゝめの法度へは用の心の及あさをもち亡ひやうし来る期になるやうに人も
用と見て道の行ちらく不行の人多くなきに孝公を志して初ハ見えけれた
名の大々人殊にれ志ある者はみて人のそれより法くる経大禄をうけてハ
道の行ひまさるを恥しやむことなく縦横して諸侯の賓客となりて周流
し人をめ後世の遊説の者と日を同しくして世のまへならぬ志あるとて孟子を
孔子よりもなき後世の口実とする人多し依てあとは孔子を小成とも辞して
事へ誤と孟子を出かれ次孟子は仰しにしたる官職なし道学を説
道徳を任してまさに人の祖もによって待世る亦有り後世の弊（ツイヘ）にまたり
於こまるに志あるに孔孟ハ天吏也無為の時の卜子也るを覚えて天下の
大道を行ひし人也今の大道の本を知りて道を任ずるに我身
の不徳を志て小人中にして君子の名のりんとにする荷物おもくする
人是の鞍馬に乗るかし孟子を知りて後世を見ずとも思ひ
今の道者と称するものは工商に於てなれるなりそのもとにまきて弟子をまつ
ぬるの上なり所に川なり孟子の罪人と云ふ無礼なる仏と云ふし者を
あやまり道学の床道をまつたるかる世人も恐かしと安心せし鍋かね
子ても医者をのみて小袖羽織着て出家は法橋法眼となりて手物に

乗り並までやせきびその子までも出家に成て経をよみ読誦をさせは
長老と成て高座にのぼる身と成らん（相違之）聖賢の道を任せ身と
云者を其上文を除て座の者申してそ人々をつかまへ其云人なれハ代皮
の五代なとやうのまねなくてハ奴僕しき人猫多し相応工商申して
亦あひぬるもの也世俗よりもつろ申して乞食ほどの者のふくろうことを子共之
世よりなくひなく出家してくらん者を節ても助申てもうられなう
大方たまりくのらうくことゝなりまてハ身分の倍性重とすることの医者も
人々のきうおそのまハなくれども医術の上手次第なるもの也又ハ薬をよ
免ても可し坊主ハ酒肉をも食し婬戒を犯もちらし迷ふて其術
を法ともぬきハあまり人命のきみかれハ男女人々のえてむなきことる下

聖学をすると人倫を知られ人道にて人々の肝要なり（一段端より）忠なる人の代
皮数をぬくる向て云今時は民間に訴有ても取れしてさまよふ費多し
代皮なるもの其悪必至申して此費をやめハ訴ふる者も免申して一段も其
上にも出来有之一段あるは五分も百姓にまうして五分ハ上へ免申て
是已上其内にて代官所属まよ借米多くあし　私曲なき様にすべき
〆する儀是有之　其余米を以てハ国中いづれの所にても取修すべ
し　若云肉に其通に守り帰り来らまにとも理屈と欲と情との品
ちを済んと存してハ縦初も国郡のまハりまとハなくなりまめにて修り之敷
の身に唯今様にも人数と云は何ほとん其上に一両人々にて人有之　其入用
を別に合力をさせて経を世外にからまして其とも別になくる有余ハ有申し

在々村々ニ於ては甚く悲しむへき理に候得共入置候事なれは
外へ出し申さす内々にて済し申も同し事の様に候得共去年の
情を能存し居らるゝ者なれ共同しき人へ申して自然と知れ候はゝ
大なる人々に候へとも其身分にても免れて是を免し在て民を
痛めしむへし　此上に主殿の慈悲二心なきのみなれて　一代たりとも有へ
きの代官あり是は其免のよろしき所もあるに立て其節の事は世の
為にも也へく候し　左りとは主殿の代官所は元行に如何　君子と
人の恩を知らぬそのものは後の始末なき様に百事分別あるへき
事也

同志の者はいかにしても候哉　田舎の主殿の代官にも地頭
一万石の領主にて代官人を置て領主に一万石を人にて免許ある
なりあしく悪き者に二人之人も事ゆゑ次に組合を選て一人申して組合と
申すを遣し　百姓前より私曲なき様にさすへしと組合衆あれは在や
代官にても其御下し在所にては庄屋は今の上代の組合と申もするへし
惣百姓も人の父に立てあしく候はゝ毛見と云ことも大にあしき事也
出免を窮めらるへし在様にして百姓ゆゑるとと云ふハ飢饉等と云もの
と出る也　並軍国水旱の憂に候へし　悪しして物を出せは精しくなん
其法をもつて作付免をよく立て上へ進し候とも何の目にも見えす
法の立つ者には百姓奉公太夫の如くも
下々のは木村猿ふ化其免の如く好みの上にも一人ずつ悪事
多く下米の高免に如て一五年ともありしは武士たるもの所業すり切て

細微に及ぶものし人にハいふもおろかなる程の事也

一 心友曰司馬遷の伯夷叔斉と巣父許由とを同じ程にいへるは道理を
知らし伯夷兄弟の諫にのりきかさるを兄弟共をひかり且紂が悪政
をさけんとするなんめり首陽へ入りたる事ハ君臣の義を行ひしゆへに
山居隠逸を好みたるにあらず皆時の義有りてなる事也許由ハ時の義の外
なる事に身に世中をいとひ山水を好み清遇なるもの也義なき
の隠者君子の道に非ずとも伯夷と同じく論ずべからず　答曰是至
論也総じて許由が類を知りし事を手職禄を捨てて山水を好み
隠居をしたるを尊み君子の道にあらずといふ事は両事を知らず思ひ
迄ての諺し事ハ天下の不肖人にも知る事也代々弓馬の家に生まれて武士の
法を知るは粗きにあり氣力の有るものも心の如くを勤めざる事同事にして
扨又古は五等の人倫の外に道者といふものありき総じて今の世に
生まれて己が家業なる者ハ武士ならば武士の法を知るべし農工商も
農工商の法を知るべし其所に從ひ法を知りて奉公するものは
盗の外をまぬかるべし天下国家の政教に至りてハ手前の事にあらず幸に倫文の
法を知らず過て君子に及ぶとも武士の名を失ひ為れと是故に氣力
ある者ハ其業に身を入るべし總て大病などもやまし又は山にも籠りて
右の事を見て手ぬきを行ふもの千大河とも渡すべき程なる強き馬も
かく見るまでは武士の勤め心のよしなくして後身を失ひたる見まては居たる人を
作おきたる事なりの士大将にもあくれきの不事を不足と言ひてあらはざるゝ程ハ

謂ゆる川の流ぬるし　出告もすく由では事有る時も猶違す人
なる故人に信ぜらるゝ事薄からし　國家の用をなす人少なし　多く無用の
者とおほ農工商の業を捨て　あるひは病気なとして人を欺くしく
おほき事に気もあきは多く山中の一木石とおなしく人としてあるの不有を
なしる所の世に益なくとも害なし　是又人不知の義なり
許由も賢なりといへども政にあつからざる事はなきゆゑ一人知る所の有て二義
初使とおもへしが一の担を得てそもそもなり

一心友同弟子は賢人なり　曰大儒とする者のなる人文賢し經傳の語に
なきそれば古今一人の名人ゝ古人の心を付てることを付けんとはあらまし先ハ初学
のためにもよく道理の学ゆる語にいふ一条ハ後世のその

大ま其を好けり　同王子ハ賢人か　曰文武ある士と云其のなき者名
大将にて又賢にし　孟子の良知良能の奥意を知る故に自反慎獨の功に
おきて後生の学者をして自ら省しむ　吉人德を明らかにする術
なれば内にもとむるなれば經傳を見ざれば德も理も知の事なる名別
なる所有り　同二子の学は何の事ぞ　曰弟子は文に知識ある
德成る者有り　學者理学に因して心法を主とし書ハ多くとて書中の
先の見知し愚ハ分し　要を經賢傳ハ皆我心の註にし愚を知て後是あるハ
用なし知く後書ハ用なし　一貫一理よ大やうよする所も
ありなれを見て心を知べし　日用の功夫におきてハ楽しくなるなり
備り能きの其道は義安用の楽まるなり多く書の楽しくなる

我はからの朱学ハ偏りに章句を分ちて文句の理に落て心を失ふ

ところ多し今の朱学するものは日蓮宗のうちにも日蓮を

信するものも悉も朱子の道をらくへいでらしと於て今ハ是を信に承頼ハ

道の本を知ら今も却てまた心法を理義の為に屈してらる朱学者の如く

にて朱子を聖門の罪人とするも　王子ハ仁にあれとも約に過て

異学禅家の流に似たる事有り学者のよし其流のえを大学に在る

その為り又王子の罪人也　問二子ともに賢なる所ハ何そや

曰二子ともに天理を合として人欲を去一人の罪なき者を殺して

天下を得るともせさるの義を一にす二子の賢人といふへき所也

問来者も王子の学者にや老有り　曰志なし我年をうけて

問学せんとは文才なく文学なし気力如何にもし財に不幸にして

学者なるをもしらす何の事に精神を労し病気にて後十二歳の時初て書

の文字読をならひ集註に依て四書を学ひ廿七の七月ニ病に依て中江氏に帰て

うちしきりとも帰て又九年に病に依て来年の四月まで在て孝経

大学中庸を学ひき是より後て文多る旨仕へを辞めんてめよ江戸に行き其ハ

東江州の人也寛文の頃に母并に妹とものに別れ其の家に京都にも西江州

にも行ことなかりし家まつしく貧にして独学せしこと五年なりき去る人

母弟妹のあるをしり飢饉の飢死に入なんとするをあはれみて久しく是を恵み

むかし中江氏王子の書を見て良知の旨を悟り二十年も前さとられき

然るに其後大学の力をかりて朝夕一派に成る儒者にも学問のあるの状

故ニ其頃儒者の中ニして仏法を謗ること年久しく今より凡そ一百人祖絶て聞ることなし要するニ儒者ハ文筆を以て志ゆるの者ハ今に在るを太り悦て排仏せしめ其外只外風流なる事を好む者も亦少なからず若あるは其身にあまりて主人甚だ此を格しけるとき其身は世に名を志るさんの初主人志の出来るもしかりけるに其時ハ良知の学をまなびけるとき江西にて学びける者を指して良知を主張せり依て志真なる者その八珠家と切なりと思ひて十百信して王子の学を唱へ世の人のきく所多かりしにかく世に亡ひする学ニ義理もなくして中江氏死去なりき中江氏は其身寛永年代の人にて学の風俗を伝へ続業を伝へける所あるべき学者未熟にて異学の法の元もありき又年舎の知て悔しくは学も其所にあらん（き所有りし）

中江氏藤樹の門を始として皆粗学の者ともなれは少なからずき者一人もなかりしに中江氏の名をかりて江西の学者の名の実をもてあそふこと十百倍なれは儒の名もおもき夫（也）予か見る所も人の云ふも学流の異端を争ふ所あるを見經をさへ未書をすてて要經のことなれは朱子王子とも三要經を云得て今まれ此くも助とはならすへし老荘を許してある事なるその者は肖へされ此は見とも此て後て関東にも此れ儒者と成て人々も此れ多く人の知所ハもしの所なりし

学者同仏（儒）の別ハあるきの所そ善同輪廻をふといふも所あるとし

同事くよ異なし

善悪事しの黒白は根なり出し造化輪廻なりけ儒仏の事を悟らし出て汝等に汝儒者となれ我仏者となりてならん儒仏氏寂滅の果万物滅しならし多る所を成仏とは我儒生

其の理ハ奥深し　曰 饒益を解たるなくに當形其滅し万欲除去る所の

人を寂滅為楽とす　問 是又後人の理を附たるならん 妻子を経やうし

子孫を絶し父捨志とれ 共に君を見むとは苦を知らぬものは子孫第一悪を為す

者ハ子孫亡ぶるは悪を為して子孫を亡し仏氏の苦を受し 何ぞ益

然とも苦行を法とせしや苦行無益なる方便か　曰 仏氏も大虚を以て天道

何ぞ知らるべき　問 志らは何ぞ悪をなさしむるや志らしむるの方便か

曰 悪をなして子孫亡ぶるを寂滅に似られたり 其悪人輪廻して他生にて又今人

子孫を絶たらしむなられたり 又他生に於きて子孫あり 無数苦行ふしして

子孫を絶者ハ出家としすてに子孫を絶し又我が清浄にして輪廻を離る故

問 志らは天地万物なるをは志らざるなり　曰 やめり出ても上下より一物なし

問 先生いふところの　曰 造化輪廻也てハ我又仏を知れし 志るとも輪廻の

理なし 元来無為なし 是以仏氏の言非し仏氏本来の面目を云ふとも

後来より見をなる故に無為をつくる輪廻を云り 又十二万歳の後に天地萬物皆

無に帰る何ぞ山物の内に苦労あるべし 堯舜の御代とては邪魔なるべき所

なし 天下の無明輪廻一時に滅せ何ぞ門ことを要へて頭に功なきおとと

せんや 何かるべく仏氏の伝 天下の輪廻人となり 無為者となり 悪業内外に

帰く流めり 妄執の帰る者出家に志くハなからん　問 仏者云ふ事理不之

んすてに輪廻あり何ぞ地獄輪廻なからんや と　曰 本夜の星は海中の

営も我もなく[illegible]の多く出ず滅輪廻と云ふを我も見ると知るべし

心に思ふは身に不[illegible]有り　問 自然輪廻の仲あるそのいふて

問曰人死して後に有者猶見るとは佛法以来常の事有りや否や
よりて生ずる目病にて空中に花を見るごとし　空中に花なし　眼の病よ
りて生る者異あるは心中に大なる迷ありて其明に悟らずして　氣味
あしき物ありて心神乱れ疲れもする故妄ありて心乱れ病明て後行て
又其大なるは天狗となりて見えもせんて後明にありて来りて松若の如くする
以答し也　後生輪廻なし　佛法よりて後生輪廻を争その説にあり
もなし　其僧幽霊ならんて曰後生も又ありけるものと心し後生の
説ありて幽霊と執する所を見んよりて奇特也　問怨霊幽霊などの
事多くしあるべく　曰万ニ人よりも人の儀によりて人あるならば魂魄のこ
しやうまでの後生まで望人は皆沈魂滞魄となると有まじ　数有りて滅せしもの
名僧の天狗となるも数ありて皆滅しより天性を去らぬものは多欲と
同しく生滅を甚だ執着深きにより其甚死を惜まる者多くして沈魂滞魄の是と
なる者あり　定まる理とは此れ人の心全の形ある間の事也　真の者は
形色声臭なし　何ぞ生死にまよはんや　幽明人鬼一貫也　問天狗となる者は
何ぞや　答学文有りて高慢多欲なる者の沈魂滞魄天狗となる者あり
故に学者の坊主の中にありしも多し　生半の出家は欲あり又高慢すべき
程の学力もなし　故に天狗にもなる事あるまじく

一　朋友問曰何の法も聞いたれども紙を書物紙にうつしても無別あらく
なることはいかん　答曰人の様のまゝは希くなるといへどもすこしてるものは
氣のありどころを存し氣をさきとする故に目をぬまてあやしまるは是故し

精神内にあつまるときハ敬也これ出家の貞吉の道の不達者なるゆへにハ危きこと
なき所に精神ちらぬ也よく見しりて心もくらからぬ地にて目を
好ミきにありてつらきをこらへて事也　僧ありて曰出家に着る所に
悪き出家かるとの出家をうしとおもふかや着也よりして争も
物我もまする也　善曰志あり我か為をするとも儒に着せハ猶
の弟子たりとも見へたり弟子王学者の貴人へも志あり大人てなきといふへき
学問し天地の神なる大道と云我国ハ日本の水土よりの神道
あり大道を名なされ我国の道あれとも残る所すしてそれは神道
とも云へし

一心友問そこの人ハ貴老の弟子の中にも列すへきほとの身上の人也彼より書
文のうやうやしきはさもあるへし貴老よりも同しくうやうやしきハ何てあることや申候ん
曰此人におきて別に奇特なる事もなし　大樹の明なるに又他国の人也武士とは
おもより定まる事もなし　曰君に事へては次第のみにあるは古今に候へ
へきろおきてかる我弟子と他の弟子とはそれや思ひなる親疎あり他国の人
に対しては其身上の分限を尊ふへし　問貴老他国の家老へハ状の文
うやうやしくあるしきれ他国の人に対して不遜なるやうにハ小身の方より見えぬ
あるへしきぞ　曰福ある者ハ人多し天の命也天の命数多人あるは
うやうやしくハあるまじや是我分にあるへし他国の人へ我弟子にも有へきほとの小身
の人の我をうやまハはしはしあるへし志あるものハとて此方よりもうやまひを
交へきまであれはあき也文士の義也彼を理にてうやまひ親しき義をも存す

義理一ぺんに富らるゝとならば

一 心友問ふことの人は小身なれども他家の人にもしれ切かゝりある文武にやく
しるしし書老よりの此門家の他の弟子よりの文武に弱き類なりと志らは
彼よりも今は文武に達り いかなる故にて候や　曰かの人は他のしに
秘し大神の朋友にても帆し思ふ人術ときる事には我恥しめよまきに志
らまとても思病者なるにて對談して人に教ゆる事かされ從来の事蓄我
あまた多り二事一かくして益をゆかりとしいふまでまきは思ふ術を秘したり
の和人にしかも大身なりとも文武あらるべかられ況やかの人におゐては思又
多人に秘めて伝しけれどもやらしくすべき事は道理のうへ無之なく多
人の恥めにおよぶのみなり思ふ又のうへやしくしるしねたりて申とゞめるよ
初の文武をかへて同輩のらくあるを事とて他人の義をこえ徒を無らせる
なるは義に宜し時所位の三つにしきあそ絶えざるし大神の朋友にもあれ無く
一の故ある道理をたちとよるに義をこえてらるし思ふ書によりて益を得られしと
いふ事をとおき此方の文のすまらてうやしくらるゝをとゞめて文武あこまるは
徒とこのゆるし是より後は人に對してあらそひする事を相かまへ将年寄に
志てある断寄特なる事は多人なれども皆々其寺持のことふにして術ゆへし
大切なる事ある人にに次

一 心友問そこの人ゝ市井の中より出る平士の武士にも相随ふ次第
それ老々熟熟に礼を為ししおのこと何ぞや彼に向ふ事も
あく一斎なり何ぞ一斎のゆへくのことく次ぜんや　曰かの市井より

出たりといへとも武家の孫なとて庶人の家に育ちぬれハ其上大名の知人にも仍頃
大名の申しなとあれハかの人に恥かしき事有りて君々方より免へ
ぬるとも人に一字をも向ふことなく我を有しさしむきて有へからぬ
徒に忘恩を情をたましいれたるひ同しからしかまたり 此方へ無礼にも
時の義とあるにハちるも見られ況や彼も又尓の士庶の分を見へハまして
相敬せり

一心友同閭同僚の貴老への文御も右の敬せる有り貴老ハ一藝の師を
ぶるを敬し彼へを大道を真しめの人をなのかし 貴老の文御ならやし
又一座の礼同輩のらしとて そしる者有るく 同じ君の臣士なれと
彼人を内廣に医士と内医と其官位をれ交為付と杯のりて貴賤の所有り

相敬せるにも其老若道徳の親をもて心を友とせる時は其身を入るゝものを
そ世天下に生まれぬるまゝ人なし故に昔は天子の元子と云へと士なりと
いへり故に士は天子の御をし 天下の大樹諸侯の本地し是故に士は天子の
直臣と諸侯の陪臣のたぐひならハ己を争ふなるへし 傍輩の中の交りにてハ
年をもて先後をなし是をよくハ敬せるに云 直臣と陪臣とは其臣年若
なりとも陪臣の先を越すとも三臣のまなるへき 然とも今は今の風俗なれハ公用
の交りには都て争ふことなかし 私交の交りを差別のなれし 我有徳に
あるれハ貴きところなくして君の道を知る人を其臣を敬せるへし
我も亦道徳の交りなくして公用のかゝらぬ所なれハ位の何色かハ恥も
孟獻子友五人 貴きを乙富者をさしはさむ 同輩のごとくして

友とせるは主人の命も献子か富貴をわすれ己か貧賤を忘れて友とせるとかや
古の道なり今の世の風俗ハかくの義を志らされハ甚あしく
其上内座を致し或ハ外なるきの風のまゝなるにしたかふ
ところありとかくその士の元爵をしる次第を忘れておのつから於こもりし事り
ふるくつもりし時三公の職にあらしむる事ハ次人ハ悪ら虚名を高くしてあやまれき
餐膳あるにしもすこしもかはらぬ事も能く心得て朝夕の常と見
へさりき後あひ茶出ぬ事侍りして次の間に立退きしくして入る事は
其由盃て飲人なし関内侯のきまりあるましく先皆に事なり
ゆつりあひき其間に関内侯の来てくるとあへ先次の者まても於くり
珍しき事ある時も重宝ならて於くりぬる下に拾て礼しまへつるも名残
よろしからぬも顧を付ぬやり此人さのみに道徳を志らぬにはさりしからハ士の本分
己が主人且時の義を志らぬ人もこれ諸侯の陪臣に公用をうけて来る
時は主客にかはり差別を以て次第にて論ずる間ハ門座に会飲せし人を招かれ
世の為の事にあらん各別の義ありて来るときのならひは主命をうけて
海ことの賓客とし又合飲の客に何されハ必ず礼義のこうやくしくして
まうでれしの訛を知し此時にあらすして事を於こなふと心に止りき
三公をよかくのこと況や他の関内侯をや志る徳を重ん貴をあふハ
天を楽しむ事の徳あるとも徳有りとして貴人の尊ひなれハ貴人の徳
あり事これにたかひて尸のおもくしてほこりかならんハ悪の甚なり
貴きとするて居りくしてまるとも貴人又事を敬ひて経へハ相ゆつりて旧葉の

ましいはき真の勢ひにして又其外貴人あるは徳を成しまし道をもつて弟我
無情なしかれは宜しきより九拙とも一門らの貴をさしはさみ
弟子諸臣のあしらひなしかるべし是ら大猷の侍者なとて未らは
色之甚し能さしとて可帰のことあり常式の席をなほしまいし
それしかれは時の宜を忘りかれは婦人の無情に似て丈夫の無切に
あれは大たるよ貴へる人なれと相召しらり至てゆる此

一心友向俗儒といへども聖賢の道を以て是道を得なぶなれは敬すべきか　因弟よりあと見そのは俗儒とても物を聞人は甚ありハ懇勤すべし　先るにあるべし　同公候伯子男の位の人を俗儒とはいふあるべからずや　因るものは文学を以て産業とし身上

我あるは凡く者なりと一万石以上の歴々は是非と思はれ様に人と交はりも人のすこし文学の精粗厚薄によるとて孫のことあまりとも文学によりて孫をもむ事は一つにあるとは我師とすべき道理のそのし世事をとらりあるべく医者なとに似よう町医者の名医ならを学ぶことに就きあへきことなしあるへきか弟子なとききそのは是を師とすべきやうなれ一　其の故は高きあるを同じくへ敬まるべし　向志るは貴老も又諸侯の臣なりき貴老の身にわたりの人を師とすべきほどの大名ならは諸臣の旅もくるしからず事しかるべき　因弟よりて甚しして他のをとるべきことのにあらされとも其公なるそのかしして他の諸侯に見ゆるすいはさも有べし弟八人の師となるべしその計に形を見況や道学の末にて公方にも請ひあける

座られむしよりのうちはたらきは也二し[illegible]さうも[illegible]し公方ニ
御志あらハし[illegible]立るした道学の事をならいてめされは二十八山中の称し人
なるへし皆学ふへくられ公方とても居とし古今治しきことなくならんや
諸侯ともや

一 朋友問て曰志有りて貴老ニ御学問中なる者今ハ他ニ有り此者ともの
申候ひしは貴老ハ学者のきこえあれ共家内の躰ハ学者とも[illegible]
多く世中の文盲なる武士の家風にさまある故ニ我くも出入する事を服し一度
御挨拶もうけたまハる事のよき[illegible]合と思ひ候　答て曰其者の申分
尤ニて候其[illegible]学者そてなき所は実ニ家風の世なミの武士
なる事も必定也其者共の存分ハ先ツ学問故ニ人親と[illegible]我

得るとおもへと向学を武士のかくし藝なる事を志て次第ニ武士を去る
よあるれ農工商ともに各其職ありて学を毎と道を行ふの志なかるへし
藝のこし才ハ天のあたへる所なれとは学て為へきよあれ故ニ徳を尊
ものは己々のあたれる可き役職にて居すもとを自知有ハ必なりと
きゝふ事と人々学ひても其役儀を勤むへし思量あるものは上より命し
あわし向学あるとても思慮ともなきこともの役勤を任しても其事
行ふもの倍[illegible]もなるまして人事は志あるもとなる有り多く人
道学を嫌ひて多あしくとも其ものあしき衣裳をみなて交際て其
人の実身の生付たる才気をみれは必定ゆへる事の用つき所あるも多
く人学者をロよ至るをきらひとも其交の衣裳をみてね色

てらの法度の者かしこく人々の実なるんは士君子の官職として何よりも

如此しき者何にて毎に吉人ともに天の命せる位に居て問学をかくし

藝とせは初て道徳の学人倫に明かにして末道具の学なりともくるしからし

の学者ハ文武二道なりしに今の学者ハ学寮坊主小賢の者多し

儒家の学者も古の学者にて文武を兼ぬしらは見る者すけ

ともなへし且文字勤論の外に学問に学んへ武家の学寮の形ニ

あるもなく形へハ武家の風にはあらしてさらし当て役領を得るハ

世にあるの武士をも言以抹殺せんより外の書なしらしむきも見ゆ

もし先の過ちなり武帝の天子の身なから講説説法せらるゝかことく

武士たるもの其ものゝ形ニ講談なとせしる形也其あやまちハ学者の氣ニ入

道をとりめきるら太子氣よある決新作学者を坊主る者の有なとて士君

子の道を志す輩も志るきとも今の学者の所為も何か見ゑ気力

つらう犯附の形にすくやうなる所は紀助を約して随しらは文武二

家風かし可得者なかるへし

集義外書巻十六終